



イイケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 566 回 相手を尊重し合う中に、「モラハラ」はありえない

2014.3.2

京都の丹波に、百歳を超えた老婆がいた。

「お婆さん、いちばん思い出深い話は？」との問いに、

「二十四回殺されたことだけは、忘れられん」と…。

どうということかと尋ねると、悲しげに老婆が言う。

彼女の家では、不幸にも今まで、子、孫が幾人も先だち、二十四度の葬式を出した。

悲しみに暮れるいずれの葬儀でも、参列者が、

「このばあさんと代わっておれば…」と、ある時は陰で、ある時は面前で言い放つ。

「その都度、ワシは殺されたんじゃ」…老婆は悲しそうに、そう、つぶやいた。

仏教が説く、「悪口(あくこう)」の有名なたとえ話である。

悪口(あくこう)とは、文字通り、「わるぐち」のこと。心ない一言や、悪意に満ちた言葉は、「舌刀(ぜっとう)」となって、深く、人を傷つける。「刃物は肉を切り、言葉は心を切る」、正に言葉は時として人を傷つける凶器となる。言ったほうは自覚がなくても、言われた方は死ぬまで、忘れられないものだ。不用意な発言がどれだけ人を怒らせ、悲しませたことか。思わず発した一言が、時に取り返しのつかない事態に発展することさえある。

「言葉の暴力」は、学校教育の現場で、あるいは恋人同士や夫婦間でも、そして日常的職場環境においても、モラルハラスメント(=「モラハラ」)として、大きな社会問題化しつつある。

特に最近のネットの世界は、筆舌に尽くし難い。顔が見えない匿名の世界、いわば「無法地帯」ゆえ、本性がむき出しになり、無責任な誹謗中傷する人間へと、変貌してしまう。

「悪口の快感」は、悲しいかな弱い人間の「性(さが)」、言っている個々人一人一人を見ると、決して悪人ではないのだが、集団化し易く、消費行動の「デモンストレーション効果」の如く、広く、深く、醜く拡散していく。

それは正に「語殺(ごきつ)」であり、知らぬうちに自分まで、その共犯者になりかねない。

人間関係の最初のきっかけは、「言葉づかい」によって決まるとも言われている。

相手に自分を伝えるのは言葉、あるいはその言葉を伴った振る舞い、態度、しぐさである。その一つ一つに相手への優しい労りを込めた心があれば、無礼で、不用意な言葉は浮かんでこない、つまり相手を深く傷つけることはないはずである。

その言葉としぐさによる会話とは、「自分を一方的に主張する」のでなく、「あなたの事を理解したいから」…この思いを相手に伝えることで成り立つと思う。

だから、相手を尊重し合うコミュニケーションスキルの中に、「モラハラ」はありえない。